

『対話劇』

作・演出 長谷川 浩輝
プロデューサー
ドラマタッグ 坂本 樹

登場人物

ユウ……………喫茶店のマスター。エミとは「年来の友達。白人。

エミ……………ユウの友達。エリカの母親。日系2世。

ジョン……………喫茶店の常連客。教授でもお堅い。白人

エリカ……………エミの子供。10歳。ハーフ。

モーリス……………偶然喫茶店に迷い込んできた。保安官。白人

※の台詞は同時に発されてもいいものとする。

舞台は喫茶店の店内。花道が喫茶店への出入り口になっている。上手のカウンターの近くにはけ口が一個ある。

舞台上にはユウがいる。オルゴールを回している。オルゴールの音が止まる。照明、徐々に明るくなる。

S1

ユウ エミ、覚えてる？ あのジョージアの細い路地。私がエミに最初に話しかけたのって、多分あそこだよ。会社では話しかけれなかったし、それでも子供がいるのは知っていたから、あそこで話しかけるしかなかった。エミさ、最初はきょとんとして、何したらいいかわからないって感じで、買い物袋を持った途端、まるで半分にしぼんだみたいになって……面白かったなあ、だつてさ、エミは軽くなったのに急にしぼんじゃうんだもん。

いろいろなところに旅行に行ったよね。ジョージアのアトランタ、オールバニ、オーガスタ、それにフロリダ。そういえば喫茶店立ち上げたときも二人でコーヒー乾杯したよね。建築会社の土方どもはあちらにいて、土方がお酒を飲んでるのにエミは飲まないで。そういえばエリカはあの時、外でバツタ追いかけてたよね。そうだ、この店開いた時に(○昔)、ご近所に配って回ったチラシ、それから店に置いてあるメニューも。エミが描いてくれたじゃない。まだ新品のカウンターの上に紙広げてさ。あのメニュー、未だに使ってるの。エミの描いた絵、とっても好きだから……。あのね、エリカもとっても絵がうまいのよ。あの子の絵を見るとやっぱりエミの娘なんだな……って。

私たち、いろいろお話したよね。本当にいろいろなこと。エミとの思い出、話したこと、ひとつひとつ、私、覚えているよ。エミも多分、ひとつひとつ、覚えてしまっているよね。

また話したいな、この喫茶店のカウンターで。

ユウ、オルゴールを置き、カレンダーをかける。ユウ喫茶店を掃除する。
ジョン、入ってくる。

S2

ジョン やあ

ユウ あ、いらっしやい。

ジョン (座り) 近頃の学生はダメだね。イデオロギーというものを持っていない。髪を伸ばして、くだらない音楽なんか聴いて、フォークだのロックだのなんて粋がってるんだ。

ユウ どうかしたの？

ジョン この間話したジーンという男いただろ。あれ共産主義者だったんだ。

ユウ まあ。

ジョン ジーンは授業もきちんと受けないで、ガムかんで隣のミスミラーとずっといちゃついてたんだ。ミスミラーもミスミラーでさ、ジーンが話しかける度に
うん、うん、なんて

ユウ まあ、熱い。

ジョン くだらないよ、恋愛なんて。所詮は繁栄のための道具に過ぎないんだよ。

ユウ そんなことばかり言ってる。ジョンも一度は恋愛したじゃない。

ジョン はっ、あんなものまやかしたね。一時の気の迷いだよ。だってよ。

ユウ ……ごめん。そうだよ、…最近だもんね。

ジョン くだらないんだよ、あんなもの。人間は産まれた時から罪をかぶっているんだ。恋愛なんて大したものじゃないよ。

ユウ むしろその前に恋愛したことはなかったの？

ジョン その前か……ああ、一度だけしたよ。

ユウ え、本当？

ジョン 本当だよ。

ユウ ねえ誰と？

ジョン 巻き毛の女の子だよ。

ユウ なんて名前？

ジョン キャサリン。

ユウ フー、キャサリン。

ジョン やめてくれ。元カノの名前で呼ぶなよ。

ユウ だってジョンにそんな。

ジョン 元だからな。イヴァンカともまた違うんだよ。

ユウ ……

ジョン (咳払い) 恋愛なんか、歴史に残らないんだよ。歴史に残る恋愛なんかないんだ。

ユウ それもまた暴言だと思うけどね……

ジョン (ふん) 文学の方が歴史に残るさ。100年の時を経て残っている文学が何作あると思うか？ それに比べて100年の時を経て残っている恋愛がいくつある。

ユウ そうだね。恋愛より文学の方が歴史に残るかもしれないね。

ジョン そうだよ。

ユウ ……でも楽しかったでしょ？

ジョン 楽しかった？ ……そんな、一時の気の迷いさ。

ユウ 本当かなあ……。

ジョン やめてくれよ、この年にもなって。恥ずかしい。

ユウ そうね……。……キャサリン……

ジョン ……なんだよ。

ユウ キャサリン……

ジョン だから何だよ。

ユウ ほら、顔赤くなつた。

ジョン 馬鹿なことするなよ。……思い出しちゃうじゃないか。

ユウ あら、何を？

ジョン 何って、……。 (はあ) イヴァンカのこととかをだよ。

ユウ ……そう。

ジョン どうも時代がよくない。妻たるものは夫のために努力すべき存在だろう。

ユウ そうかもね。

ジョン どうもおかしいんだ。独立だとか、妻への暴力だとかさ、……そりゃ男が同じことやられたら黙っちゃいないよ。だけど女で、その、妻だぞ。

ユウ そうかもしれないね。でも暴力はよくないんだと思うよ。

ジョン わかってるさ。……それが原因の離婚だ。

ユウ ……娘さんには会ってきたの？

ジョン ああ、シェリーか。会って来たよ。

ユウ 元気にしてた？

ジョン ……むしろ少し元気になっていたよ。

ユウ そう……。何話したの？

ジョン 何話しただろう……。そう、学校の話とか……。学校は変わっていなかったんだ。前と同じ担任で。

ユウ そう。

ジョン 担任の悪口言っていたよ。相変わらず。

ユウ 担任の先生合わないんだ。

ジョン 合わないっていうか……。居残りさせられたりさ、そんなこと。

ユウ へえ、大変だ。

ジョン そうだなあ。あの年の娘には大変だろう。……そんなに生き生きと生きられるかなあ……

ユウ 何が？

ジョン シェリーだよ。……俺いなくなったのにさ……

ユウ ……コーヒーいれようか。

ジョン うん。

(間)

エミ、エリカ入ってくる。

エリカ こんにちは

ユウ あれ、エリカ。今日来たんだ。

エリカ うん。

ジョン やあ。

エリカ やあ。

エミ こんにちは。

ユウ エミ、いらっしやい。

仕事あるんじゃないの？

エミ 今日は早く上がったから

ジョン やっぱり小学生は純粹だ。この身が洗われるようだよ。

ユウ それ聞く人が聞いたら怖い人だと思われるよ。

エリカ どうしたの？

ジョン 汚れない君を見ていると大人でも清らかになるんだ。

エリカ ふーん。

ユウ 何でもないの。どうぞ。

(エリカ、エミのついた席へ)

ユウ ちょっと何言ってるのエリカに。

ジョン ただ清らかになるって言っただけじゃないか。

ユウ そうじゃないよ。言い方の問題だよ。

ジョン え、言い方って。言い方ってなんだよ。

ユウ えくつと、なんて言うか、エリカかわいいね、みたいにさ。

エリカ 何？ エリカかわいい？

ユウ かわいいより、エリカは。お人形さんみたい。ほら、お母さんのところに行つといで。

エミ エリカ。

ユウ 違うか。なんて言えばいいんだろう……(以下ジョンとふたり話す)

エミ 今日は何にしようか。

エリカ うーん、コーラ。

エミ 帰ったら歯磨くんだよ。

エリカ うん。

エミ ……約束だよ？

エリカ わかった。

エミ ユウ、

ユウ はい。

エミ ブレンドとコーラ。

ユウ は、いい。

エリカ 今日ね、漫画の続き描いたんだよ。※1キャサリンがね、お母さんのこと追いかけるんだけどね、お母さんは悪い魔女に連れ去られてしまったの。

エミ 私が？

エリカ ううん、お母さんじゃない。※2キャサリンのお母さん。

エミ そっか、そういう話だったね。

エリカ そうだよ。…それでね、※3キャサリンが追いかけるんだけど、魔女は家来たちを怖いカエルにして庭に放ってね、キャサリンがお城に入れないようにしたの。

エミ そしたらキャサリンはお城に入れなくなっちゃうね。

ジョン ※（小さめの声で）え、キャサリン？

ユウ ジョンのことじゃないんだよ。

ジョン ※2キャサリンって…

ユウ だから違うから。

ジョン ※3ほら、やっぱり。

ユウ いいのいいの

エリカ そうなの。でもね、キャサリンは消火器があったから、消火器でカエルを追っ払ったの。そしたらね、悪い魔女が「キャサリン、よく来たね」って。「キャサリン、お城の中へお入り。私、あなたのために、パーティーを開くところなの。」でもね、悪い魔女の言葉は本当は嘘なの。悪い魔女はほんとね、キャサリンに毒を食べさせようとしているんだよ。

エミ へえ、怖い。

エリカ キャサリンは騙されて毒を食べちゃった…

エミ ああつ。

エリカ キャサリンは死んじゃいました。おしまい。

エミ え、おしまい？

エリカ うん。

エミ それじゃあキャサリンかわいそうじゃん。

エリカ （へへへ…）でもね、キャサリンほんと死んでないの。ほんと秘密なんだけどね。

エミ へえ…！！ キャサリン生きてるんだ。

エリカ お母さんは特別だからね、特別に教えたの。でも、ほんとに秘密だよ。
エミ ありがとう。

ユウ お待たせしました！先にコーラと、コーヒーのブレンドになります。
エリカ ありがとう。

エミ ありがとう。

ユウ どういたしまして。おばちゃんも聞いてたけど、面白かったよ。

エリカ そう？

ユウ うん、ね。

ジョン 古典的な魔女を踏襲していたのが、やっぱり純朴だったなあ。

エリカ へえ。あのね、これ続きがあるんだよ。

ユウ そうなの？聞きたい。

エリカ じゃあー、今度！

ユウ エリカも大したものね。

エミ そう？うちの子最近まんがばっかで。ね。

エリカ だって習い事いけないんだもん。

ユウ そっか。漫画だって勉強だもんね。

エリカ うん。

ジョン おじさん、本貸してあげるよ。

エリカ え？本？

ジョン 本。楽しいよ。

エリカ え、嫌だ。

ジョン そっか。

エミ 本とか読まなくちゃダメだよ。

エリカ うん、でもフェリーの冒険あるよ。

エミ でもせっかとおじさんが貸してくれるんだから。

ユウ 私エリカの絵、みたいな。

エリカ 今日持ってきてるかなあ……

エリカ (漫画を探し) 持ってないかも

ユウ そう？

エリカ まってね、絵描くから。

ジョン ……お勘定。

ユウ 今日は早いね。

ジョン 学会があるんだ。

ユウ そうなんだ……3ドルと20セントになります。

シヨん、お勘定。

ユウ ありがとうございます。また今度ね。

シヨん、出てく。

エミ ……ねえ、ライター持ってない？

ユウ あれ、禁煙は？

エミ いいのいいの……どうせ健康被害なんてたいしたことないし。

ユウ、ライターを差し出す

エミ (煙を吐き) ありがとう。

ユウ なんかつたの？

エミ うん。

ユウ また会社？

エミ うん。上司から文句われちゃった。私は押しが弱いんだって。こんなんじゃこれからやっついていけないらしいよ。

ユウ そうなの。

エミ そう。一応、ちゃんと取ってるんだけどな。

ユウ そう。誰から言われたの？

エミ ジャクソン・テイラー

ユウ ジャクソンかー。あー、そっか私も言われた。

エミ そうなの？

ユウ うん。あなたは意気地がないって。私の方が取れたのにだよ。あの人、その意気地で取れるとこ落としてるんだよね。営業かけすぎてるの。

エミ そうかなー、確かにちよつとひいちゃうけど。まあ、確かにあの人同じこと30回くらい言うよね。

ユウ そうそう。

エミ でもやっぱ怖いんだよなあー。お客さんも怖い人多いじゃん。

ユウ そうかなあ？ そっかあ……。

エミ だからさ、どうしても自分の身は自分で守れないと。ガツンと言えたほうがいいのかなーって思って……。

ユウ でもエミの今の感じも私、好きだよ。

エミ そう？

ユウ うん。かっこいいよ。

エミ そうかなあ……。
ユウ そうだよ。あんまり無理すると健康に悪いよ。
エミ そうかなあ……。そうだよねえ……。
ユウ 自信持たなきゃ。
エミ うん……。
ユウ エミにはエリカちゃんもいるんでしょ。それだけでもすごいことだよ。
エミ 私一人で育てたわけじゃないもの。
ユウ ううん……。でもそれは、エミが一番がんばったのよ。
エミ (笑って) そうかな？
ユウ そうだよ。自信持たないと。
エミ そうだよね。エリカいるもんね。がんばらないと。
ユウ そうだよ。その調子。
エリカ ねえ、描けたよ。
ユウ そう？……。あら、かわいい。
エリカ はい。
エミ ほんとだよ。お姫様だ。
エリカ これね、キャサリンなの。魔法の国のお姫様なんだよ。
ユウ これがキャサリンなんだ。
エリカ うん。
ユウ 髪が金色で、目が青くて。かわいい。
エリカ へへ……。
エミ 今度漫画持って来なよ。
エリカ うん！

場転。照明一度夜になる。ユウはカレンダーをめくる。

舞台は昼。喫茶店にはユウとジョンがいて、ジョンはコーヒーを飲んでる。

ユウ 今日はえらくご機嫌じゃない。
ジョン (そう) 見えるか
ユウ うん。全体的にご機嫌だよ。
ジョン そうなんだよ……。論文あげてきたんだ。
ユウ あら、おめでとう。
ジョン おう……。タイトルは『風洗式便所と砂漠の排泄空間における経済性』なんだが、

ユウ 待つて……聞き間違いじゃなきゃいいけど、……さつき、『風洗式便所と砂漠の排泄物における経済性』って言った？

ジョン ああ。……正しくは、『風洗式便所と砂漠の排泄空間における経済性』だけど。ユウ どっちでもいいけど……あの、それよく論文として提出できたね？

ジョン ああ。学術的なものだからな。風洗式便所が、水洗式のものよりどれだけ経済的に便を排泄できるか調べてみたんだ。

ユウ そう。

ジョン そうなんだ。実は水洗式のものに比べて、風洗式便所は年間約23万ドルもの節約になるらしくて、

ユウ うん、

ジョン 風洗式といっても、湿度が低いから、乾燥して匂いも残らないんだ。

ユウ うん、あのね……とりあえず喫茶店で便所の話をするのはやめようか。

ジョン え、だって研究の話だぞ。

ユウ 研究の話でもよ。あのね、喫茶店でトイレの話をするのとコーヒーがまずくなる人いるの（ジョンはコーヒーをのんでる）。……ジョンはならないかもしれないけど、まずくなる人はいるの。

ジョン まあ、まずくなる人はいるが、ここには誰もいないだろう……マジョリティの意見に乗じて自分の意見を言うんじゃないぞ。

ユウ まあ、そう言われればそうなんだけど。……これはマナーの問題なの。誰か人が入っても続きそうな話だったし。

ジョン そうかもしれないな。……だが風洗式便所は綺麗なんだ。

ユウ 綺麗かどうかは問題じゃないの。喫茶店でトイレの話はしないでよ。

保安 ごめんください（大声）。

ユウ あっ。あっ、はーい。

保安 ごめんください。

ユウ こんにちははーい。どうぞ（テーブル席へ）。

聞かれちゃったじゃない。

ジョン 俺は悪くないだろ。

ユウ ジョンがこんな話するからよ。

保安 メニュー。

ユウ あっ、すみませんただいま持ってきまーす

ユウ、メニューもって行く

保安 Hey（ページをめくり）コーヒーちょうだい。

ユウ おひとつ……？

保安 ひとつ。

ユウ はい、わかりました。

ユウ、コーヒーを作り出す。シヨン、思案顔

シヨン、モーリスと目を合わす。

保安 なんですか？

シヨン いや……。

彼前にも来たことあるか？

ユウ 来たことないと思うけどね。どうしたの？

シヨン 前にも見たことあるんだよ。どこでだったかわからないけど。

シヨン、モーリスを見る。お互い首をかしげ、かしげたまま元に戻る

ユウ ちょっとやめなよ、多分気のせいだよ。

シヨン そうだろうか……。

ユウ 怖い人だったらどうするの、シヨン。

シヨン 何だよ、こんなところで襲※われるって言うのか。

保安 ※シヨン……（モーリス、目をしかめ）シヨン……シヨンがシヨン……

ユウ、驚く

シヨンも見る

保安 Oh! シヨン・ウィリアムズ!

シヨン 誰だっけ?!

保安 モーリスだよ!

シヨン あれ、

保安 私は、モーリスだよ!

シヨン あ、ああ! ……これはこれは

ふたり、握手する。

保安 お久しぶりだねえ!

シヨン ああ、懐かしいよ。イタタタ。

ユウ よかったわ、ふたりが知り合いで。

保安 元氣してた。

ジョン ああ、元氣だったよ。

ユウ もう何が起こるかと思った。

ジョン 知り合いと再会したんだよ！

ユウ (切り替えて) ふたりは何のお知り合いなの？

保安 高校の同級生で。

ユウ へえ……！ そうなの。

ジョン クラスが同じだったんだ。どうも腐れ縁だな。

保安 ホントウに久しぶりナンダ。

ユウ そう〜。ごめんなさいね、まさか知り合いだとは思わなくて。

保安 イエイエ、誰にでもあることだ。

ユウ そうね〜。

ジョン ……モーリス、何になったんだ？

保安 私？ 保安官。

ジョン そうか。君らしいじゃないか。

保安 とりあえずのぼり積めたから、ここで安泰ね〜。

ジョン そうか。頼りになるよ。

保安 頼りにしてくれたまえ。あなたの職業？

ジョン 一応、教授。

保安 お、わあ〜 (拍手)。すごいじゃない。

ジョン ああ、たまたまなんだけど。

保安 たまたまじゃナイよ〜！ ジョンは頭良かったから〜

ジョン ああ、そうだったな。

ユウ よかったら、座れば？

ジョン ああ、そうだそうするよ。そっち行っているか？

保安 いいよ。

ジョン、コーヒーのカップごと移動

ユウ、モーリスにコーヒーを渡す。

ジョン 懐かしいな、あの頃の知り合いに会えるとは。

保安 同窓会行かないの？

ジョン そんな暇がなかったんだよ。

保安 楽しいよ。

ジョン 今度行ってみてもいいかもな。最近までは本当に忙しかったんだ。

保安 そうなの？

ジョン 風洗式便所や、キリストのつけている冠のいばらの種類の研究をしていたんだ。
保安 Oh~~~~独特だねえ。

ジョン まあな。誰もやっていないことをやるからこそ、研究の価値があるんだ。

保安 ……懐かしいなあ、高校時代。

ジョン そうだな。

保安 ジョン、読書好きだったね。

ジョン そうだったな。

保安 それに10日に1回くらい、歩くときの右手と右足一緒に出た。

ジョン そんなところまで見ていたの。

保安 保安官の卵だから。人のクセを見るの、好きね。

ジョン たまげたな。自分でも気づいてなかったんだぞ……モリスだってすごかっただろ。毎日星条旗の入ったTシャツを着ていたじゃないか。

保安 愛国心じゃん一介の。

ジョン それに国歌斉唱の時こんなになって歌ってたじゃないか。

保安 軍隊では普通なんです。ジョンだってシャツのポケットのボールペン、逆さになったの気づかなかった。

ジョン 不慮の事故というやつだ。機能性は申し分なかったぞ。

保安 シャツをインするスタイルが普通だと思ってたのは誰だ？

ジョン 100万円の営業商材にだまされかけたのは誰だ？

保安官・ジョン (イ) エイ(モリスとジョン、腕を合わせる。)

モリ やっぱり同級生はいいねえ

ジョン やっぱり過去の遺物はいいなあ。

保安 ジョン、あなたに会えてよかった。

ジョン それは僕も同感だ。

保安 ジョン、あなた結婚してるの？

ジョン ああ……最近まではいたんだ。

保安 Sorry~~~~つかないこと聞いた。

ジョン いいんだ。むしろせいせいした。

保安 奥さんどこが嫌いだったの？

ジョン いや、妻の方から別れた

保安 (驚き) 珍しい。

ジョン 時代のせいさ。

保安 じ、時代……

ジョン やはり時代のせいなんだ。なんだか最近おかしいんだ。学生はロックばかり聴いてる。フェミニストらの運動もある。

保安 ジョン、仕方のないことよ。それは誰にも止められない。

ジョン やはり昔はよかったよ。戦争に勝ってお金もあった。僕たちは学問をして、踊って
いさえすればよかった。

保安 ジョン。

ジョン 今や経済も頭打ちだ。労働者から回ってくるはずの金は、次第に少なくなっている。
今や国力も足りないから、ベトナムにすら勝てていない。

保安 ジョン……（お酒を注いでいる）

ジョン おい、なにやってるんだよ。

保安 シー……秘密ですよ。……あなたの将来に栄光あれ……

エリカ こんにちは！

ユウ あら、エリカ。

ジョン ……やあ。

エリカ ……やあ。

保安 ……やあ。

エリカ ジョンの友達？

保安 そう。今日久しぶりに会ったの。

エリカ ふーん。

今日ね、ベアくんがひどいことしたんだよ。

ユウ 何があったの？

エリカ ゴキブリふみつぶした。

ユウ ええっ？ 学校でゴキブリ出たんだー。

エリカ うん……。でも、踏み潰したんだよ。ひどくない？

ユウ うーん……ゴキブリだったらしょうがない気もするけど（ドアの外を確認）。

エリカ どうして？

ユウ やっぱり気持ち悪いじゃん。

エリカ そうかな。

ユウ 今日は一人なの？

エリカ お母さん買い物してから来るー。

ユウ そっか。

エリカ ゴキブリなんだけどね、おばさんところでも出たことあるの？

ユウ 出たことない。

エリカ そうなの！ すごーい。

ユウ エリカのところではでたことあるの？

エリカ あるよ。でもお母さん弱いからね、ゴキブリ外に出せないの。

ユウ そうなの！ 大変だね。

エリカ でもエリカ外に出せるよ。

ユウ へえ……！ すごい。

エリカ だってお母さんだめなんでもん。大人はゴキブリ怖いのかな？

ユウ そうなんかね。でも学校でもだめな人多いでしょう？

エリカ あー。なんか男子もね、弱いよ。

ユウ そうだろうねー。うちの父さんも苦手だもん。

エリカ おぼちゃんのお父さん？ じゃあおじいちゃんか。

ユウ そう、おじいちゃん。エリカの大叔父さんだ。

エリカ 大叔父さん。大叔父さん。おじさんのお父さん。

ユウ 違うよ。おぼちゃんのお父さんだよ。

エリカ そっか。……エリカね、今日クレアちゃんちいった。

ユウ そうなの。

エリカ メアリーとジェシーとクレアちゃんだね、お菓子食べたり、おうち探検したりした。

ユウ そうなの。

エリカ お菓子がね、すごくおいしかったんだよ。一個一個、ビニールの袋に入っているの。

ユウ あ、それ高いやつだ。

エリカ そうなの。……それにクレアちゃんち、シャンデリアあるの。

ユウ いいなー。おぼちゃんちにもシャンデリア欲しいなー。

エリカ だめだよ。シャンデリアすっごく高いもん。本当にお金持ちにならなきゃ。

ユウ そうだねー。エリカちゃんお金持ちになるの。

エリカ なれないよ。

ユウ なれないの？

エリカ だってエリカんち、お金ないもん。

ユウ そんな、お金なくてもお金持ちになれるよ。

エリカ そうかなー。あとね、クレアちゃんの大レエシューズかわいいかったの。

ユウ そうなの。

エリカ うん。クレアちゃん大レエのかっこうしてくれただけだね、ふわふわしてて、キ

ラッて感じてね。

ユウ へえ……。

エリカ みんなバレエシューズもってるんだ。メアリーも、ジェシーも。

ユウ ふーん。ブームなんだ。

エリカ そうー。かわいい。

エリカも欲しいなー。

ユウ そうなんだ。

ジョン やあ。

エリカ やあ。

ユウ どうしたの？

ジョン 本日はお日柄も良く、またエリカちゃんにおかれましてはご機嫌麗しく、このたび

この喫茶店で会えましたことを誇りに思い

ユウ なになに。

ジョン あいつが。エリカのことを呼べって。

ユウ ※へえ

保安 ※Hey

エリカ こんにちは。

保安 私はモーリス。

エリカ モーリスって言うんだ。

保安 ジョンの友達のおじさんだよー。

エリカ おじさんって(笑)、自分で言うの？

保安 おじさんだから。

エリカ おじさん(笑)。おじさん、結婚してるの？

保安 ※結婚しているよ。

エリカ おくさん美人？

保安 美人だよー。

エリカ へー。どのくらいかわいい？

保安 この世で一番かわいい。

エリカ わー！ おくさんそうなんだ。

ユウ ※なんかお酒くさいな、気のせい？

ジョン 気のせいに決まっているじゃないか。

ユウ へー、ほんとかな。

ユウ なに言ってるんですか。真に受けちゃだめだからね。

保安 ひどいねマスター。初対面で。

ユウ だってお酒飲んでるんだもん。

エリカ お酒？

ユウ うん、アルコール。

保安 ……あ、私？

ユウ うん、……てやっぱり、お酒のんでたんだ……。

ジョン お酒は命のブレーキなんだ。思わず高速道路に乗ってしまったんだよ
保安 ジョンが、悲しんでたから、お酒をついだんです……悪気はないんです。

ユウ わかった。わかった。もう、マスターの断りもなしに、なによ。

ジョン それは(俺は悪くなくて)

保安 ごめん。

ユウ ……それ、出して。

保安 えっ……（モーリス、恐る恐るポケットからウイスキーを出す）

ユウ、それを取り、手の届かないところに置く。

ユウ わざわざ持ってくるのが悪いんだからね。

シヨンはしょぼくれている

ユウ うちはお酒おいてないんだから、せめてチャージ料は払いなさい。

保安 ……いいの？

ユウ もう、特別だよ。

保安 わおう、マイフレンド！

ユウ わかった、わかったから、お酒くさい。

シヨンは、今日はこれ以上お酒のまない方がいいよ。

ジョン ああ、わかったよ。

保安 たんとはずむよ、マスター。

ユウ そう？ 期待しちゃおっかなあ

保安 オーケー、マイフレンド

ジョン モーリス、地球は丸かったんだ。

保安 ジョン、それはみんな知ってる。

エリカ お酒っておいしいの？

ユウ エリカにはまだ早いかな……はい。

保安 マスター、あとでお礼するよ

ユウ あっ、うん。

エリカ お酒って何で子供は飲めないの？

ユウ 気持ち悪くなっちゃうよ。

エミ こんにちは

ユウ こんにちは。

エミ（エリカのところへ行きながら）あれ……お酒臭くない？

場転。同じく照明、一度夜になる。ユウはカレンダーをめくる。

昼。ユウ、エミ、エリカが話している。エミとエリカの机には飲み物、さらにはエミの書類とエリカの宿題がある。

ユウ エリカ、キリン好きだったよね。

エリカ おつきくて、かわいかった。

エミ 大きい動物好きなんだよね。

エリカ うん。

ユウ また3人で、どこか行かない？

エミ 行きたいな。

エリカ わあ！ どこ？

ユウ そうだね、エリカどこがいい？

エリカ うーん、おいしい店のあるところがいい。

ユウ じゃあ、海際の水族館行こうか。母のおすすめの店があるの。

エミ そうだね……お金貯まったら。

ユウ うん、あんまり高くないところにするよ。

エミ ありがとう。

ユウ これも会社の？

エミ うん。

ユウ 大変だね。

エミ まあね。……エリカも宿題してるし。

エリカ、宿題始める

ユウ 私も子供欲しくなっちゃう(笑)

エミ ユウは結婚しないよね

ユウ そうだね……エリカがいてくれたし……

エミ 結婚しなくていいの？

ユウ うーん、結婚相手見つけてまでさ……面倒くさくて……

エリカ 結婚？

ユウ まあ、私はしないんだけどね。

エリカ えー、ユウの子供見たい。

エミ 子供産むのも大変なのよ。

エリカ わかってるよ……。

ユウ 赤ちゃんできたら見せてあげる。

エリカ ええ、本当？

ユウ うん。

ユウ そうだ、エリカにいいもの買ってきたの。

エミ いいのに、いつも出してもらってるんだし

ユウ いいっていいって

ジョン やあ

エミ あ、ジョン。

ユウ こんにちは

ジョン、新聞を読み始める

エミ ほら、宿題しなさい。

エリカ はい。

エリカ ……：…：ねえ、ここわかんない。

ユウ モーリスとはあれから会ったの？

ジョン 実はまだ会ってないんだ。

ユウ そうなの。

ジョン けど、今日これから会う予定なんだ、この店で。

ユウ あら、そう。

ジョン そうなんだ。

ユウ じゃあ、準備しなきゃ（ユウ、隠してあったウイスキーの瓶を取り出す）。

ジョン それ、置いてあったのか？

ユウ 預かりものなの、モーリスから。

ジョン おお…：前と同じやつ…：。

ユウ 先週末の時に置いていってくれたの。

ジョン ……：それ、ちよつともらっていいか？

ユウ ダメよ、モーリス来る前は。

ジョン そうか、禁じられた喜びか。

ユウ そうよ。

ジョン モーリスも大変だよな、あれで。

ユウ そうなの？

ジョン 黒ん坊の味方しなきゃいけないんだぞ、法律上、

ユウ そうねえ…：私たちもそこまで悪いことしてないのにね。

ジョン そうなんだ、黒ん坊なんてものに肩入れしたら、俺たちの人権がなくなるぞ。

ユウ そうね。黒ん坊なんてアフリカに行けばいいのにね。

エリカ お母さん？

エミ 何でもないの。分母の違う分数を足すときは…：。

ジョン 公民権法なんてできなければ良かったな、南部の実態とあまりにかけ離れている。
ユウ まあ、そのくらいいいと思うけど……でもまだデモが起きてるじゃない。

ジョン そうなんだ、いつまで続くことやら。
ユウ デモを起こすのは問題がある人たちだって、新聞に書いてあったけどその通りなのね。

ジョン そうだよ。

ユウ それより、モーリスいつ来るの？

ジョン そろそろじゃないかな。ちよつと早く着きすぎたから。

ユウ そう。

エリカ お代わり。

ユウ 宿題終わったの？

エミ 帰ったらするって。

ユウ ふーん。

……あつ、そうだエリカ。

エリカ 何？

ユウ いいもの買ってきたんだ。

エリカ え、何？ いいものって。

ユウ エリカがほしがってたもの。

エリカ エリカが欲しがってたもの……？

(ユウ、段ボール箱をもってくる)

エリカ エリカ何ほしがってたんだろう……

ユウ はい。

エリカ ありがとう。

ユウ 見てごらん。

エリカ (開けて) えっ……いいの？

ユウ うん、たまにはね。

エリカ わー！

エミ 何もらったの？

エリカ 見てみて。

エミ え、バレエシューズ……？ こんな高いものいらなのに。

ユウ いいのよ、もらってた。

エミ でもさすがにこれは高すぎるわ。

ユウ 高すぎるからこそよ。私じゃなきゃ買えないんだもの。

エミ でも、こんなに高いもの……。

ユウ いいのよ。たまにはエリカにも贅沢させてあげないと……。

エミ うん……。

エリカ おばちゃんありがとう。

ユウ どういたしまして。

エリカ お礼に漫画描いてあげる。

ユウ そう？ ありがとう。……それ、人が来る前に隠しちゃいなね。

エリカ うん……ちゃんと隠しとかないとね。

エミ エリカ、大切にしなきゃダメだよ。

エリカ うん。

これでメアリーとジェシーにも自慢できる。

エミ でもバレエ教室通わせられないよ。

保安 ごめんください。

ユウ あっ、モーリス。

保安 ごめんください。

ジョン おお、待ってたぞ。

保安 ジョン（握手）。

ジョン いたたた

保安 相変わらず弱いね握力。こんなんじゃあ保安官やっていけないよ？

ジョン 人を保安官できるかできないかだけで判断しないでくれよ。

保安 私保安官だもの。そういう判断好きね

Oh, キティ。ハロー。

エリカ ハ、ハロー。(?)

保安 エリカ、先週のジョンの件はすまない。

ジョン なんだよ、俺はなにしたんだよ。

エリカ いいよ、おじさんが謝らなくていいんだよ。

保安 Hey, ジョン。お酒飲む時は加減しなきゃだめぞ。

ジョン お、おう……そう言われればそうなのかもな。

ユウ おいといたよ。

保安 Oh~~~~ウイスキー。マイフレンド。

ユウ 特別なのよ。

保安 わかってるわかってる。ちゃんとチャージ払うから。

ユウ そう、ありがとねうち選んでくれて。

エミ、立つが何も言えず座る

保安 どうしたの？ 韓国人。

ユウ 韓国人じゃないわ。エミはこの子のお母さんなのよ。

保安 おー、これは失礼しました。日本人？

エミ ……そうだわ。

保安 ワォー、そうしたら宗教は神社？ 仏教？

エミ どっちでもないの。私宗教は入ってなくて

ユウ エミはね、アメリカ産まれアメリカ育ちの生粋のアメリカンなの。

保安 おー、そしたら仲間ねー。よろしく。

エミとモーリス、握手

エリカ エリカ漫画描いてるんだよー。

保安 へえ、読みたいねえ。

エリカ はい。

保安 キャサリンと魔法のお城。その2。

昔々、あるところにキャサリンというお姫様がいました。

設定資料。ドレス、ステッキ。

わー（肌の茶色いメガネの魔女に友達が連れ去られる）。キヤーやめてー。絶対離さない。わー！

魔女の家来たち参上（より茶色）。

キャサリン、変身（より白くなる）。

増えて、増えて、増えて。

わー（家来たちが倒される）

けーっけっけ。愛なんて意味がない。こうしてやる！（友達の目が赤くなり、髪が黒くなる）

でも好きー！

私もー！（友達戻る）

Oh〜マイガーー！（吹っ飛ばされる）

（★11ページの絵が欲しい）

エミ なんで敵役みんな茶色なの？

エリカ え、だってそうじゃないの？

保安 何言ってるの。そんなこと気にしないであげなよ。

エミ まあ……（笑い）

エリカ でも嫌だったら黒とかできるよ

エミ エリカ、

保安 まあまあ。そこまでやるとよくないよ。

エリカ そこまでって？

保安 まあー、あんまり肌の色を黒くしすぎなちゃいけないの。

エリカ へ〜、マナー？

保安 そう、マナー。

ユウ はいはい、お酒できてるよ。

保安 わお、それは最高ねえ

ジョン 喜び、解禁。

保安 ハッハッハ。ジョン、今日もたくさん飲むぞ。

ユウ ダメよ、ジョン、弱いんだから。

保安 いいじゃんいいじゃん。

ユウ じゃあ……私もちよつとだけ。

ジョン 女でも飲むんだ。

ユウ 飲むよそりゃあ。

保安 たくさん飲みなよ。

ユウ それ全部おごってくれるの？

保安 ええ、私のおごりねえ。

ユウ へえ、いいじゃない。

エリカ お母さんお酒飲まないの？

エミ いいのいいの。私すぎじゃないから。

エリカ ふ〜ん。

保安 それじゃあ、今日は集まってくれてありがとう。父なる神にこのアルコールの感謝を
して、チュールズ。

ユウ・ジョン チュールズ！

保安 ジョン、君の憂いの話がまた聞きたいよ。

ユウ そんなもの大したことないんだから。

ジョン 大したものなんだ。今度のは本当におかしな話なんだ。けれどももう君たちには、
狂ってすぎて聞かせられないんだ。

ユウ 何かあったの。

ジョン 今度は何もかもがなくなったんだ。

ユウ また奥さん？

ジョン 奥さんじゃないんだ。

保安 ジョン、水くさいよ

ジョン 水くさかったんだ。

保安 ジョン、流されすぎだよ言葉に

ジョン 流されてしまったんだ。巨大な水洗式便所が、頭の中に出てきたんだ。

ユウ ……ジョン、またトイレの話？

エリカ 何〜、トイレ？

ジョン 違うんだ、本当なんだ。たとえばかじゃなくて。

エリカ トイレ？ 大人が？

ジョン そう、大人が。水洗式便所に大切なものが全て吸い込まれてしまうんだ。イヴァン
カとつないだ手の感覚とか……ほら……。

保安 Oh, ジョンカモーン。

ユウ それが聞かせられない話。

ジョン 聞かせられないだろう、本当にあるんだ頭の中に

エリカ 頭の中にトイレがあるの？

ジョン そうなんだ。ずっと流れているんだ。

保安 足りないんだよ、お酒。

ジョン そうだな、飲めば消えていく。いただきます。

保安 ジョン、教授は順調なの？

ジョン 順調なんかじゃないさ。共産主義者が跋扈する教室が順調なわけないだろう。

保安 Oh, あなたもねえ。

ジョン モーリスもなんかあるの。

保安 オールバニの黒人が風紀を乱しているんだ。スラム街があるだろう

ジョン 本当だ。お酒がないとやっていけないよ

保安 そうだ、この御酒（みしゅ）が命のガンリンさ。

エリカ ねえ、お酒飲むってどんな感じなの？

ジョン ああ、お酒を飲むのはね、学問をすることなんだ。

保安 子供にはまだわからないよ

エリカ ねえなんで？ なんでわからないの？

保安 子供は疲れを知らないからね。

ユウ エリカだって疲れることあるものね

エリカ うん

保安 じゃあ……飲んでみるか……？

ユウ ちよつとそれ、私ももう。

保安 ちゃんと薄めるから（水を入れる）

ユウ ……本当にあげちゃっていいの？

保安 いいさ。エリカ、（ドン）度胸試した。

エリカ 飲んでいいの？

保安 いいよ。……一口だけだ。

一同の見守る中、※エリカ酒飲む

ユウ ※大丈夫？

エリカ うーん、よくわかんない。（もう一口のむ）

ユウ あっ、もうやめな。

エリカ う〜ん。変な感じ……。

ジョン 学問の味がするだろう。

エリカ 学問……？ でもね、ふわ〜って感じ！

ユウ ふわ〜、か。

保安 Oh. お前は強い子だ。

エリカ 強い！ エリカ強い。

保安 強い子だ。

エリカ エへへへ

ユウ 水飲んだ方がいいんじゃないの？

エリカ エリカ大丈夫！ ねえ。お酒って、楽しいんだね！

ユウ あんまりはしやぎすぎちゃダメだよ！

エリカ わかっている、わかっている！（と言いつつ立って物色に行く）

保安 ホー、エリカ飲んだねえ。

ユウ まあ、あの子もそういう時期かな。

少し間

エリカ、喫茶店のものをひとつ落としてしまう

エミ エリカ！

エリカ、うつむいている

エミ エリカ、お酒飲んだんでしょう。

エリカ たまたま落としちゃったの。エリカ、大丈夫。

エミ 飲ませたんでしょう。

保安 ちょっとだけだよ。 ちょっとだけ

エミ エリカ、帰るよ。

エリカ 帰るの？

エミ エリカ、酔ってるから。この年でお酒なんて（エリカの頬をはたくマイム）。

ユウ あっ、ちょっと！

エミ おつりは要らない。ごめんね。

ユウ エミ？ ジョン、金庫見といて！（飛び出す）

保安 ウプス。間違えちゃったかなあ……

ジョン あ〜、学問の味は、子供にはまだはやかったかなあ……

場転。やはり一度夜になる。

昼、モーリスとユウ、喫茶店の中で話している。

保安 マスター、ウイスキー、ダメ？

ユウ あんなことがあったからねえ、しばらくは控えないと。

保安 エリカ弱すぎるよ。だいじょぶかと思ったのに。

ユウ まだ小学生なのよ。それにもともとお酒置いてなかったじゃない。

保安 置けばいいのに。儲かるよ。

ユウ どうしても置けないんだよ。なんかね。

保安 ……なんか？

ユウ 思い出したんだけど、もともとエミが大反対してたんだ。なんか嫌なんだって。

保安 ふうん。

ユウ ……でも来てくれるのね、お酒なくても。

保安 もう来ないかもしれないよ。

ユウ ええ

保安 えぐって何よ。お酒ないのに。

ユウ あなたがいると平和になるのよ。

保安 Fuuum。……このオルゴール、なるの？

ユウ なるよ。ならしてみる？

モーリス、オルゴールを鳴らす。

ユウ エミと旅行した時ね、職人さんから買ってきたの。太っちょのはげた職人さんでね、

22 ドルもまけてくれたの。

保安 ふうん。エミとはよく旅行行くのね。

ユウ そうよ。エリカと3人でね、いろんなところに行くんだ。

保安 ふうん。楽しそう。

ユウ 楽しいよ。エリカにもいろいろ見せたいからね

保安 ふうん。

ユウ ジョン今日も来るんじゃないかな

保安 へえ……ジョン、教授してるのかな。

ユウ してるよ。どうしてしてないと思ったの？

保安 3回来て、3回いる。

ユウ 偶然だよ。神様の思し召しよ。

保安 そんな思し召し要らないよ

ユウ まあまあ、思し召しなんだから。

エミ こんにちは。

ユウ こんにちは

保安 Hey

エミ 来てるんだ。

ユウ もともとアルコール目当てで

エミ そう

ユウ でもだいじょぶよ、飲ませないもの

エミ ほんとう？ 最初からそうしてくれればよかったのに。

ユウ ごめんね、エミがお酒嫌いな忘れてて。

エミ そっか……私でももうだいじょぶだから。

ユウ ほんとに？

エミ うん、ほんとう。エリカにさえ飲ませなければね

ユウ だいじょぶだって、もうしないから……じゃあ、二人のこなそうな時に、ちよこつとやるかもだけど

エミ 大丈夫だよ、そのくらい。

ユウ そう？ ありがとう。

保安 フー

エミ フー

保安 エミいないとき教えてよ。

ユウ でもいつ来るかわからないから

保安 それじゃあ結局できないじゃない。

ユウ そうね……夜遅くなら

保安 何くくわざわざ有給取ってやってきてるのに

ユウ じゃあなおさら都合がいいじゃん。有給取らなくてもこれるんだから

保安 モーリス寂しい

ユウ 寂しいの。奥さんに暖めてもらいな。

保安 ねえー、つれない

ユウ つれないわよ、マスターだもの

エリカ やあ〜〜

ジョン やあ

保安 Hey

ユウ あれ？ 一緒に来たんだ。

エミ そこでたまたま会ったんだよね。

エリカ ジョンがね、変な歩き方してるから話しかけてみたの
ユウ ふ〜ん。

ジョン なんだよ(変)

ユウ ううん、なんでも

ジョン なんだよ、はっきり言ってくれよ。

ユウ お酒の飲み過ぎなんじゃない？

保安 ジョン、言われてるぞー。

ジョン はい。

ユウ うちはどうしてこうも子供が増えるのかしら。

エリカ 子供？

ユウ エリカは子供でいいの。

エリカ ジョンは子供なの？

ユウ 大人だけど子供なの。

保安 Kitty, hello.

エリカ Hello

ジョン ウイスキーないのか。

ユウ ジョーン。全く……(以降も会話は続いている)

保安 お酒飲ませたのごめんねえ。

エリカ ううん。エリカも飲み過ぎた

保安 おじさんもびっくりしたよ、あんなに一気に飲むから。

エリカ それはごめん。

保安 いいのいいの。おじさんが小さい頃もね、こんなに飲まされたなあ

エリカ そうなの？

保安 でもエリカは飲まなくていいんだよ。いいことなんてひとつもないから。

エリカ 飲ませたじゃん(笑) おじさん

保安 Ah〜ha その通り。

エリカ 言い訳くらいしてよもう〜。

ジョン 水洗式便所は記憶を吸い込まないんだ。

ユウ え？

ジョン 今日わかった。水洗式便所は記憶を吸い込まない。体内へ消化された記憶は、その

ままた体に取り込まれるんだ。

ユウ ねえ、どうでもいいその話。

エリカ お母さん、椅子持ってたっていい？

エミ どうぞ

保安 来てくれるんだ、嬉しいねえ。

エリカ おじさん、私が見てないとまた飲んじゃうから。

保安 嬉しいねえ……学校楽しい？

エリカ 楽しいよ。帰りに公園寄ったりね、誰かのうちに遊びに行ったりするの。
保安 いいねえ。

エリカ クレアちゃんちとか行くと、おいしいお菓子くれるの。

保安 楽しそうだねえ。今は平和でいいねえ。

エリカ なんて？

保安 小学校の終わりからね、戦争あったの。

エリカ そうなの？

保安 そうよ。太平洋戦争。おじさんとかが出兵したの

エリカ 戦争に？

保安 そう。平和のために。アジアを日本から守るの。

エリカ ふうん。

保安 日本はね、アジアを占領して、自分のものにしようとしたの。それをアメリカが助けたんだよ。

エリカ へえ……！ おじさんも一緒に助けたの？

保安 そうなんだ。日本は小さい国だけど、強敵だったんだ。天皇のためなら死ぬるって、みんな思い込んでいたんだ。

エリカ 天皇？

保安 そう、天皇。人が日本の神様なの。

エリカ 変なの

保安 天皇は怖かった。人々を自爆特攻隊で、飛行機でアメリカにやるんだ。

エリカ 乗ってる人死んじゃうじゃん。

保安 負けるくらいなら死ぬ方がましだったんだ。

エリカ 日本って変な国。アジアはアメリカに救われたんだね（エミ、立つ）。

保安 そう。太平洋戦争は私たちの誇りね。

エミ外に出ようとする

ユウ どうしたの？

エミ ちょっと買い物行ってくるの

ユウ、……エリカを、よろしくね。

エミ、喫茶店を出る。

ユウ （ナレーション）それっきり、エミは、帰ってきませんでした。

照明は夜。ユウが封筒を持って花道から喫茶店に入ってくる。ユウ、カウンターに入り、はさみで封を切り、封筒から手紙を取り出す。

喫茶店のカウンターで、手紙を読む。

最初の数文字はユウが読む。エミ、台詞の途中から手紙を持って朗読しながら入ってきて、そこから読み手がエミに交代する。

ユウ・マーティン

久しぶり。覚えてる？ エミです。悔しいかもしれないけど、この手紙に全部書いたから、読んでね。読まないで焼き捨てたりしないでね。エリカ、元気にしているかしら。私は今でもエリカのことを忘れられないんです。エリカは多分、すくすくと育つことでしょう。そして立派な、白人になるでしょう。私たちは、戦争しました。小学校1年生の時のことです。私は当時始まった戦争に、特に興味がありませんでした。日本人という意識はあまりなかったし、日本対アメリカというおかしな構図から、目を背けていたんだと思います。しかし周りは違った。私はいじめられました。すごくいじめを受けました。持ち物を全部隠されたり、筆箱に釘をいれられたりしました。最初は日本が嫌いになりました。しかし戦争は終わっても、いじめは続きました。アメリカ人が、私を差別する先生や周りの白い生徒たちが、本当は悪いんだと気づいていきました。

そのうち新しい敵ができる、私へのいじめは収まっていきました。けれども日本人っていうだけで、いつも損してきました。

私がレイプされたときの話をしましょう。夜道を歩いていたときのことです。相手はお酒に酔っていた白人でした。あいつは私がアジア人だということを知っていました。だから襲ったのです。どうせ勝てないと知ったから襲ったのです。その時できた子がエリカです。……ハーフだと言うことは、わかっていたでしょう。私はエリカを育てました。エリカはすくすくと育っていきました。あなたたちや、あなたたちと同じ肌の色の子供たちに囲まれて。そのたびに私は、エリカが自分の子ではなくなっていくような、不思議な気持ちになっていきました。漫画を書くようになったのも、日本の漫画でなく、シンデレラや、スーパーマンなどのコミックの影響です。

私は多分ここでは生きていけない。だから、……私は日本に行くことにしました。同じ肌の色の人と一緒に暮らすことにしました。アメリカ人たちはあんなに冷たかったのに、日本人は私が英語がしゃべれるというだけで重宝してくれます。

ユウ、あなたたちはずっと差別してきた。黒人を差別し、アジア人を差別し、共産主

義者を差別した。公民権法ができて、差別は変わらなかった。私がおのたびに悲しい気持ちになっても、あなたはそんな私には目もくれなかった。そのことが私は一番悲しい。今となっては、あなたたち白人は、差別をする人種なのかなって、そんな風に感じています。

不思議なことに、あなたと出会ったジョージアの細い路地を、今でも時折、思い出すのです。でも私たちはあの頃から、きつと分かり合えない運命だったのかな。

さようなら。どうかお元気で。 エミ。

エミ、手紙を読み切ると去って行く。

ユウ 「あなたたち」……? 「白人」……?

57

場転。1989年の舞台。エリカ、ユウの肩をマッサージしている。

エリカ 今日は何にしましょうか。

ユウ コーヒー、ブレンドで。

エリカ はい。(カウンターへ)

ユウ ねえ、コーヒー私がいれるよ。

エリカ 大丈夫、おばさん。もう大人なんだから。

ジョン おい。

エリカ 何?

ジョン 僕の分も頼むよ。

エリカ おじさんはモカが好きなんだっけ?

ジョン ああ、モカで頼むよ。

エリカ はい。

ユウ、エリカのスペースへ

エリカ ちょっと、ちょっと。狭いったら。

ユウ 私がいれるって。

エリカ 大丈夫。おばさんは座ってて。

ユウ、おとなしく席に着く

ユウ 私、そういえば旅行行ったのよ。フロリダのハイアリアに。エミと3人で。フロリダの職人さんに私の母の知り合いがてね、伝統的な食器作りを体験してきたの。磁器の炉も見えてきたけどね、1400度になるんだって。何書いたっけ……ひよこかなあ……

ジョン おい、エミの話はよせよ。

ユウ ああ、よく来る……。あなた、エミに恨みでもあるの？

ジョン ないけど。だって……

ユウ じゃあ、聞いてて。エミね、食器作りのあとすこしアウトレットに連れて行ったんだけど、すごくスタイルがいいの。崩れてないのよね、あんまり。私一着だけエミにも買ってあげたなあ……確か白のニット……。

ジョン おい。

エリカ ……

ジョン おい。

エリカ 何？

ジョン 本当にいいの？ この喫茶店継ぐって話。

エリカ うん、おばさんひとりしておけないし。それに今だって実際私がマスターみたいなもんだから……。

ジョン そうか……。

間

エリカ おばさん、コーヒーできたよ。

ユウ 悪いんね。作らせちゃって。

エリカ ジョンも。コーヒー。

ジョン ああ。

エリカ はい。

ジョン ……時間が経つのは早いんだな……もう20年経ったのか……。

エリカ ジョンの産まれた頃のこと、私知らないんだよ。

ジョン いい時代だったさ。……戻りたいとは思わないけど。

ユウ どうしよう。用事思い出しちゃった。向こうのキャロルの所に、コーヒー届けなきゃいけないんだ。

エリカ それ、私やっておく。大丈夫だよ。

ユウ ほんとに？

エリカ うん、だから落ち着いてて。ほら。

ユウ ありがとう。

ジョン ああ、なんか海の向こうで、天皇死んだんだってな。

エリカ そうなの？

ジョン 太平洋戦争で生きていた昭和天皇が、とうとう死んでしまったらしい。
エリカ ……
ジョン 昭和という時代が終わって、平成が始まるらしい。
エリカ ……お母さん、元気かな。

間

エリカ 私さ、今年で35になるんだけど、思ってみれば、30年って意外と長いね。
ジョン 35年だろう。
エリカ 余計なこと言わないでよ、私今34だよ、30年だよ四捨五入すれば。
ジョン そんなところで四捨五入するのは学問への冒涇だ。
エリカ いいじゃん、まあ、意外と長かったんだよ、それが。
ジョン そうか。
エリカ 30年、30年かあ……
ジョン (怪訝そうにエリカを見る)
エリカ ジョン、ありがとね。
ジョン ?
エリカ ジョン、育ててくれて、ありがとね。
ジョン ああ。……(続きが出てこない。間。)
保安 ごめんくださーい(びっこ)。
ジョン おお。
エリカ 来たんだ。
保安 やあ、みんな。
エリカ はい(メニュー)。
保安 ありがと。……それじゃあ……ティー。
エリカ わかりました。
保安 エリカ、綺麗になったね。
エリカ そう? 来る度言うんだもん。ありがとね。
保安 そうかい。言えば言うほど綺麗になるよ。
エリカ またあ……

間

ジョン 定年か?
保安 そうだよ。あと一ヶ月で終わるんだ。……短いものだね、仕事って。
ジョン ああ。気がつく……な。

保安 もうお酒も飲めなくなったよ。

ジョン モーリスが？

保安 ああ。ここ一ヶ月ほど飲んでない。

ジョン おお、珍しい。

保安 私も定年だから（あくび）。

ジョン そうか、それはよかった（あくび）。

エリカが茶を注いでいる

ユウ エミ、覚えてる？ あのジョージアの細い路地。(Music fade in) 私がエミに最初に話しかけたのって、多分あそこだよ。会社では話しかけられなかったし、それでも子供がいるのは知っていたから、あそこで話しかけるしかなかった。エミさ、最初はきよとんとして、何したらいいかわからないって感じで、買い物袋を持った途端、まるで半分にしぼんだみたいになって……面白かったなあ、だってさ、エミは軽くなつたのに急にしぼんじゃうんだもん。

いろいろなところに旅行に行ったよね。ジョージアのアトランタ、オールバニ、オーガスタ、それにフロリダ。そういえば喫茶店立ち上げたときも二人でコーヒー乾杯したよね。建築会社の土方どもはあちらにいて、土方がお酒を飲んでいるのにエミは飲まないで。そういえばエリカはあの時、外でバツタ追いかけてたよね。そうだ、この店開いた時に（◎ 昔）、ご近所に配って回ったチラシ、それから店に置いてあるメニューも。エミが描いてくれたじゃない。まだ新品のカウンターの上に紙広げてさ。あのメニュー、未だに使ってるの。エミの描いた絵、とっても好きだから……。あのね、エリカもとっても絵がうまいのよ。あの子の絵を見るとやっぱりエミの娘なんだな……って。

私たち、いろいろお話したよね。本当にいろいろなこと。エミとの思い出、話したこと、ひとつひとつ、私、覚えているよ。エミも多分、ひとつひとつ、覚えてしまっているよね。

また話したいな、この喫茶店のカウンターで。

エリカ、ユウにかけより、彼女を抱きしめる

ユウ エリカ、どうしたの？

エリカ ううん、なんでもない。

(終)